

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520513

研究課題名(和文)日・英語動詞句省略比較研究

研究課題名(英文)A Comparative Study of VP Ellipsis in Japanese and English

研究代表者

高橋 真理 (TAKAHASHI, Mari)

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：20247779

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：「動詞句省略」とは、「文脈照応弱化」が最大限に適用され、対象となる構成素の全音形が削除される現象の一つであり、文脈内に適切な先行詞を必要とする。省略される動詞句を含む構成素とその先行詞は、Contrastive-focusを受ける。内の構成素の意味的貢献を除いて、同じ意味解釈を持つ必要がある。本研究では、日本語が、英語と同じ条件下で認可され、同じメカニズムで生成される動詞句省略を持つことを、自由動詞を主要部とする動詞句を含む構文を用いた調査・実験で示した。また日本語において、動詞句省略が適用された節と空目的語を含む節とは異なった構造・意味解釈を持つことを示した。

研究成果の概要(英文)：VP ellipsis is an extreme form of phonological reduction signaling the presence of a discourse anaphor. It is brought about by the phonological deletion of a VP which contains all the lexical materials to be interpreted, derived in the same way as non-deleted VPs. In order for VP ellipsis to be licensed, the deleted VP must be contained in a constituent which has an antecedent with an identical interpretation except for the contribution of a contrastive-focused constituent within . This study shows, based on experiments using constructions containing VPs headed by a free verb as test sentences, that Japanese has the same phenomenon as the English VP ellipsis, licensed under the same conditions. It also shows that Japanese VP-elided phrases receive different types of interpretations from VPs containing a null object, indicating that the two constructions have different structures.

研究分野：言語学、文法理論、統語理論、形態音韻論、意味論

キーワード：日本語 英語 省略 動詞句 文脈照応

1. 研究開始当初の背景

動詞句省略 (VP-ellipsis, VPE) とは、文脈に適切な先行詞が存在する場合に、統語構造/LF 表示に存在する VP (を含む機能範疇句) 全体が発音されない現象である。

Holmes examined the evidence carefully but the Scotland Yard didn't

[_{VP} examine the evidence carefully].

VPE の認可、生起には、統語構造、音韻構造、語彙列、意味・情報構造、文脈のすべてが関与する。英語の VPE はそれゆえ、ひとの言語知識の体系とその詳細を探るための優れた手がかりとして、生成文法研究史初期から次々と新しい構文・現象と関係づけられながら研究され続けてきた。

VPE を含む省略現象についての、研究開始当初の注目すべき研究プロジェクト/報告には、上山あゆみ氏を研究代表者として 2000~2003 年度の科学研究費助成を受けて行われた「省略の復元に関する理論的・実証的研究 経験科学としての生成文法を目指して」と Johnson (2008) があつた。Johnson (2008) は上山 (2000~2003) の研究分担者多くの論文を収録しているが、これらの著書/論文に日本語の VPE を扱った章は一つもない。これは、日本語に英語と同じ VPE が存在することについて日本語研究者のコンセンサスが得られていない状況を反映していた (cf. 有元&村杉 (2005))。

日本語の VPE 研究が混乱した要因は少なくとも 3 つある。一つは、日本語には拘束動詞 (bound verb, BV) (例: *sirabe*, *tuk*) と自由動詞 (free verb, FV) (例: *調査*, *到達*) の 2 種類の動詞があり、後者が伝統的に verbal noun と呼ばれ、動詞であるとは認識されていなかったこと、次に、BV がそれに続く形態素と韻律的単語 (prosodic word) を形成する場合には、その BV を主要部とする VP が VPE を受けても BV が発音されること (つまり、多くの場合に VPE が適用されても BV の音形だけは削除されないこと)、そして、日本語が空代名詞 *pro* を持つため、「VPE を受けた BV 文」と「空目的語を含むだけで VPE は受けていない BV 文」との見分けがつかない場合が多いこと、である。

a. H はすぐにその事件を調べたが SY は調べなかった。

b. i) VPE:

[_{VP} すぐにその事件を調べ] - なかった

ii) *pro*:

[_{VP} *pro* 調べ] - なかった

しかし Takahashi (2000) で主張したように、FV を主要部とする VP に注目すれば「日本語にも基本的に英語と同じ性質を持った VPE が存在する」ことが確認できる。

スコットが南極点に到達する前に、アムンセンがもう [_{VP} 南極点に到達] していた。

太郎_i は自分_i は無実だと主張したし、次郎_j も [_{VP} 自分_j は無実だと主張] した。

これまでほとんど手つかずであったこの

豊かな土壌を開拓し、日本語の VPE を普通文法理論の研究地図に載せることには大きな意義がある考え、この研究をスタートさせた。

2. 研究の目的

(1) 日本語に、英語と同じ条件下で認可され、同じメカニズムで生成される VPE があることを示すこと。

(2) 日本語において、VPE が適用された節と空目的語を含む節は異なった LF 表示を持つことを示すこと。

(3) VPE 構文で日・英語に違いが見られる部分に関しては、その要因を明らかにすること。

3. 研究の方法

(1) 英語の VPE に関する最近の重要な研究・分析を詳細に検討し、その認可条件 (=復元可能性条件: VPE を含む構成素とその「先行詞」がどの程度「一致」している必要があるか) と生起メカニズムに関して最も妥当であると考えられる理論を選ぶ。

(2) 英語 VPE の認可条件と生起メカニズムを特定する鍵となる構文に対応し、調査対象とする日本語の構文を選ぶ。

(3) 言語学や対象構文に関するメタ知識を持たない、大人の日本語母語話者を被験者として、文の適格性の判断と意味解釈を問う調査と実験を行う。実験は Zurich Toolbox for Readymade Economics Experiments (z-Tree) を利用してプログラムし、京都産業大学コンピューター実験室で実施する。

(4) 得られた調査・実験結果は統計ソフトウェアを利用して分析し、その理論的示唆の検討を行う。

4. 研究成果

(1) VPE の生起メカニズムと認可条件については、基本的に Heim (1997) に従い、との作業仮説を採用した。

VPE は「文脈照応弱化」が最大限に適用され、対象となる構成素の全音形が削除される現象の一つであり、文脈内に適切な先行詞を必要とする。

省略される VP を含む構成素とその先行詞は次の条件を満たす必要がある:

a. すべての variable assignment *g* に関して、_{VP} の regular semantic value は、Rooth (1985, 1992) が言う意味での _{VP} の focus value の一要素でなければならない。

b. _{VP} が regular semantic value 以外に focus value を持つためには、contrastive focus を受ける chain 中の音形を持つ link が、_{VP} 内に含まれていなければならない。

c. 上記は最小でも、動詞と、外項を含むそのすべての項の base position を含まなければならない。

- d. 上記 と がある variable の occurrence を含む場合は、その variable のすべての occurrences が同一の node によって bind されていなければならない。
- e. は に先行する必要がある。

(2) VPE が適用された節 と空目的語を含む節 はどちらも容認されたが、両者の意味解釈には予測される差が見られた。

VPE :

教授はそのデータを慎重に分析したが、助手は [VP Ø] しなかった。それで助手は注意された。助手はなぜ注意されたのですか。答：データを慎重に分析しなかったから。空目的語を含む VP : 教授はそのデータを慎重に分析したが助手は pro 分析しなかった。それで助手は注意された。助手はなぜ注意されたのですか。答：そのデータを分析しなかったから。

VPE は上記(1) a.の条件を満たす必要があり、省略される VP はその先行詞と同様に「慎重に」という修飾を含む必要がある。空目的語を含む VP はそのような解釈を受ける必要はなく、「そのデータを(全く)分析しなかったから」という解釈がより自然となる。日本語において、VPE が適用された節と空目的語を含む節は異なった LF 表示を持つことが示されたと言える。

(3) 英語の VPE の認可条件を特定する鍵の一つとなる「Kennedy の一般化」(Kennedy (2008)) に該当する構文のうち、省略される動詞の主語が と で同じであるかどうかの問題になるケースに対応する日本文でも、英語と同じタイプの反応が見られた。すなわち、 が適格であると判定されるのに対して、 や は不適格であると判定された。

Kennedy の一般化 — 主語一致 : そのパーティーに出席すると言っていた多くの人が結局しなかった。

Kennedy の一般化 — 主語不一致 : *社長がそのパーティーに出席すると思っていたすべての社員がした。

Kennedy の一般化 — 主語不一致 : *収入が増加した世帯がした

日本語の VPE も英語と同様に(1) の諸条件を満たす必要があること示す証拠が得られたと言える。

(4) 「Kennedy の一般化」に該当する構文のうち、英語の antecedent-contained deletion 構文 に対応する日本文 は、そのままの形では容認されない。この要因は上記(1) e.にあると考えられる。

Antecedent-contained deletion : KBS reported every incident that NHK did [VP Ø].

Antecedent-contained deletion : *KBS は NHK が [VP Ø] したすべての事件を報道した。

同様の構文で、2つの VP のうち後者を削除した も不適格であると判定されるが、関係節内から目的語を「かきませ」によって移動させた には異なった反応が見られた。紙ベースの調査でも、z-Tree を使ったコンピューター実験においても、 タイプの文の容認率は全体として 50%前後に留まるものの、 タイプの文の容認率に比べて有意に高かった。また被験者の 4 割以上が、 タイプの文の 80%以上を適格であると判定した。

Antecedent-containing deletion, unscrambled : *KBS は [VP NHK が報道したすべての事件を Ø] した。

Antecedent-containing deletion, scrambled : [NHK が報道したすべての事件を]_i KBS も [VP t_i Ø] した。

一見(1) e.を満たすように見える が容認されない理由は、VPE が適用される場合 VP 全体の音形が削除されなければならない、のように動詞の目的語だけを発音することはできないからであると考えられる。一方 では、かきませによる目的語の移動後 VP 全体に VPE が適用されており、その結果、(1) a.~d.に加えて(1) e.も満たされる。

タイプ別の文に対する反応の個人差は完全には説明できないが、もしこの要因が文処理の負荷の大きさによるものであり、この構文が文法的には適格であるとすれば、「VPE の内部からの句の移動が許される」、つまり、「VPE を受ける VP が内部構造を持つこと」を示す証拠の一つとなる。

多くの被験者を対象とした実験を実施するには至らなかったが、 も同じ結論を示唆する例である。

[NHK が報道した事件を]_i KBS も [VP [... t_j ...]_i Ø] すべて_j した。

(5) これも実験の実施には至らなかったが、 は、英語と同様の「sloppy VP 現象」が日本語の VPE 構文にも見られることを示す例である。

A 教授は、自分が学会に参加する時は弟子達も皆 [VP Ø] することを期待しているし、自分が学会をボイコットする時も [VP Ø] している。

(VPE を受ける 2 つ目の VP に、「弟子達も皆学会をボイコットすることを A 教授が期待している」という“sloppy”な解釈あり。)

(6) 構文 と に関しては予想外の実験結果が得られた。ともに「不適格」と判定されるとの予測に反して、z-Tree を利用したコンピューター実験の有効反応トークン各 80 個中、「適格判定」対「不適格判定」比は

それぞれ 77%:23%、33%:67%であり、両者には有意差があった。

agentive 拘束動詞(BV)を主要部とする VP を含む句を先行詞とする省略：
H はその事件の背景を詳しく調べたが、SY はしなかった。
non-agentive 拘束動詞(BV)を主要部とする VP を含む句を先行詞とする VPE：

*昨日定刻に飛び立った JAL10 便が今日はしなかった。

この結果は、の2つ目の節が「軽動詞すの修飾部が省略された構文である」、すなわち「のような構造分析を許す日本語話者が存在する」と考えれば説明できる。

軽動詞すを修飾できる句は agentive 動詞を含むものだけだからである。

H はその事件の背景を詳しく調べたが、SY は [その事件の背景の詳しい調査を] しなかった。

が適格であると判断する被験者が一貫して、省略部に先行 VP と同じ修飾を含む解釈を与えていることも興味深い。

(7) 以上、「日本に英語と同じ VPE が存在することを実験的手法で示す」という目的が達成されたことを述べた。Johnson (2008)が「真の文脈照応省略」と呼ぶ、Sluicing、VPE、名詞句省略のすべてが日本語にも存在することが確認でき、日本語に関するなぞの一つが解決されたことになる。

この結論が簡単に揺らぐことはないが、この5年間で、文の派生メカニズムに関しても、省略現象に関しても、研究開始当時にはなかった新しい視点からの多くの提案がなされてきた。特に Baltin (2012)などによる、「『削除か代用か』という二極的な分類は適切ではなく、どちらも統語構造派生の過程で様々な大きさの構成素の形式的素性が削除され、語彙挿入が不可能になることで生起する」との提案は真剣に検討する必要がある。本研究課題の成果を土台にしつつ、対象を代用表現や軽動詞構文に広げた新しい日・英語対照研究をスタートさせる好機が到来していると言える。

< 引用文献 >

有元将剛、村杉恵子、「束縛と削除」、研究社、2005。

Baltin, Mark, “Deletion versus pro-forms: an overly simple dichotomy?” *Natural Language and Linguistic Theory* Vol. 30-2, 2012, 381-423

Heim, Irene “Predicates or Formulas? Evidence from Ellipsis,” *Proceedings of SALT VII*, 1997, 197-221

Johnson Kyle *Topics in Ellipsis*, Cambridge University Press, 2008

Kennedy, Christopher “Argument Contained Ellipsis,” in Johnson (2008).

Rooth, Mats E. *Association with Focus*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts at Amherst, 1985

Rooth, Mats E. “Ellipsis Redundancy and Reduction Redundancy,”

Proceedings of the Stuttgart Ellipsis Workshop Vol. 29, 1992

Takahashi Mari *The Syntax and Morphology of Japanese Verbal Nouns*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts at Amherst, 2000

上山あゆみ(研究代表者)「省略の復元に関する理論的・実証的研究 経験科学としての生成文法を目指して」、科学研究費、2000-2003

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計1件)

有村兼彬、米山三明、高見健一、福井直樹、大室剛志、金子義明、西岡宣明、神山孝夫、由本陽子、松本マスミ、加藤正治、前川貴史、田中裕幸、藤井友比呂、川原功司、村田和久、今西祐介、吉村あき子、岡田禎之、高橋真理、など54名、英宝社、ことばのしんそう (深層・真相) 2015、総ページ数681中 203-214 (“An Experimental Study on VP-ellipsis in Japanese”)

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 真理 (TAKAHASHI, Mari)
京都産業大学・外国語学部・教授
研究者番号：20247779